◇◇◇ シリーズ 「会員のつぶやき」◇◇◇

産学連携について感じていること

ハウス食品株式会社 開発研究所

岩田　均

コロナ禍で2年連続食品工学会年次大会がオンラインでの開催となり，リアル開催の年次大会が懐かしく思われる．前回リアル開催された2019年の高松での年次大会に弊社の研究開発部門のトップに参加してもらった．会場でたまたま会った際，言葉尻は覚えていないが一言目に，使えそうな研究発表があまり見当たらない旨の意見をもらい驚いたことを今でも覚えている．その意味を聞くと，決して目先の成果だけを求めるつもりはないが，将来の事業化を念頭に置いて連携したい研究や，今後の動向を見定めたいと思える研究が思いのほか少なかったという趣旨のことを言われたと記憶している．

食品工学の扱い範囲は広く，高松大会での発表が弊社の技術課題にヒットしなかったとは考えられるが，食品業界や社内の技術課題に精通し将来の技術や事業に思いを馳せる研究開発部門のトップがそう感じたことに若干ショックを受けると共に，食品工学会産学連携理事の立場として耳に残る言葉となった．

日本食品工学会の特徴として，主に食品関連企業の会員で構成されたインダストリー委員会の存在があり，アカデミーと産業界（インダストリー）が連携しているとよく語られている．確かに食品工学会内でインダストリー委員会の活動は非常に活発で，アカデミーの先生方のご協力を得ながら多くの行事を担っている．しかし，アカデミーの研究を産業界が実用化するための活動は多くなく，唯一，稲熊前会長が始められた「AIプロジェクト」がそれに該当する．

「AIプロジェクト」はアカデミーの研究内容・成果をインダストリー委員会内で説明・紹介してもらい，その研究に興味を持った企業会員が個別・秘密裏にその研究者とコンタクトが取れるお見合い的な活動である．この活動で実績があったかどうかは，途中から秘密裏で行われているため不明であるが，アカデミーの研究を産業界で実用化するための良い活動だと思う．

逆に産業界のニーズ（企業の技術課題）を広くアカデミーに伝えることは，産業界での課題解決やアカデミーの研究の実用化促進等に大変有用と思うが，企業同士の競争の観点から自社独自の技術課題を社外にオープンにするのはなかなか難しく，インダストリー委員会内でそのような活動は公式には行われていない．「AIプロジェクト」で「秘密裏に」というのはそのあたりの企業の意図をくんだ稲熊前会長が心遣いである．

ただ食品工学会は企業会員も多く，年次大会技術交流会の様な「非公式な場」も多かったことから，その様な場でアカデミーと産業界のコミュニケーションが本音で行われ，企業の技術課題がある程度アカデミーに伝わっていた様にも思う．しかしこの様な「非公式な場」は最近コロナ禍で無くなっており，より伝わり難くなっていることを危惧している．

現在，インダストリー委員会では，会員企業各社共通の技術課題について研究する常設の研究会の設置を検討している．共通課題であれば企業もオープンにし易く，企業単独では専門家の協力を得難くい場面でも，学会としての活動であれば協力を得られ易いため学会活動に適していると考える．学会としてもその成果を会員企業に提供することで会員サービスの向上や企業会員の獲得も狙える．

研究テーマはこれから検討することになるが，地球温暖効果ガスの削減，廃棄物削減，AI・ロボット技術の食品への応用等が候補イメージとなっている．個人的には，温暖効果ガスの削減は，2050年カーボンニュートルが最終目標になるが，難度は相当高く，食品の加工プロセスの改善・新手法開発・装置開発等，広範囲で相当量の研究開発が必要になると考えている．この様な課題にモノづくり学問である「工学」を冠する食品工学会が関与するのは相応しく，新たな研究会のテーマにも適していると考えている．

産学が連携する際，アカデミーと産業界の課題認識の共有は非常に重要と感じている．この新たな研究会の様な活動がコミュニケーションを増やし課題の共有を助け，産業界・企業のニーズにマッチした研究が少しでも増えることを期待している．

参考文献

稲熊隆博：AIプロジェクトへの期待 ── 研究と開発とは ──，日本食品工学会誌，18(4)，A2～A3(2017)．

岩田　均（Hitoshi IWATA）
1980年　東京水産大学水産学部食品工学科卒業
1980年　ハウス食品工業株式会社 入社 研究所配属
1993年　ハウス食品株式会社に社名変更
2017年　定年退職 再雇用 現在に至る
〒284-0033　千葉県四街道市鷹の台1丁目4番
E-mail: h-iwata@housefoods.co.jp

© 2022 Japan Society for Food Engineering